

生活科

山岸 朋子

1 生活科における知識創造とは

実感から生まれる
気づき

生活科の学習は、「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験が基盤となる。探検する、調べる、つくる、育てる、技に挑戦するなど「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験は、子どもが楽しく夢中になって取り組めるものである。しかし、子どもが夢中になって対象とかかわるだけでは、活動や体験を楽しむことに留まってしまう場合も多い。活動や体験をすること自体を目的とするのではなく、自分なりの思いや願いをもって「ひと」「もの」「こと」とのかかわりを楽しむことを通して、それら対象の本質を実感し、気づきを生み出していくことを大切にしなければならない。そして、その実感から生み出された気づきを直接及び間接的に交流し、紹介し合ったり、比べて考えたりすることで、自分の気づきを再確認し、さらに新たな気づきを生み出していくことができると思う。

生活の中で生きる
気づき

また、学習の中で生まれた気づきを「わかった」「できた」で終わらせるのではなく、生活の中で試してみる、応用してみる、継続していくなど、自分の生活に生かしていこうとすることが必要である。そうすることで、それぞれの気づきが生活と結びつき、生きて働く知恵となっていくと考える。

生活科における
知識創造の定義

これら一連の営みを生活科における知識創造ととらえる。そこで、生活科における知識創造を以下のように定義する。

自分なりの思いや願いをもって「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験を通して 「ひと」「もの」「こと」に対する実感を伴った気づきを生み出し その気づきを自分なりに工夫しながら生活に生かしていこうとする営み

2 生活科における「かかわり」の活性化とは

友達への積極的な
働きかけ

生活科では、「かかわり」の活性化を、自分の願いを実現するために、積極的に友達に働きかけながら活動する中で、新たな気づきを生み出していこうとする状態ととらえる。

3 「かかわり」を活性化するために

生活科における
「かかわり」の意味

自分一人で夢中になって活動していても、自分なりに活動や体験を楽しみ、自分なりの気づきを生み出すことはできる。ただ、その気づきは限定的なものとなり、広がりが期待できない。友達とかかわりながら学習を進めていくことは、自分の気づきをより明確にし、新たな気づきを生み出していく上で欠かせない。

友達と一緒に活動し、友達の活動の様子を見たり、話を聞いたり、友達に方法を尋ねたりする中で、自分の気づきと友達の気づきを比べて考える機会が生まれる。その中で、自分の「ひと」「もの」「こと」のとらえ方と友達のとらえ方を比較し、同異を知るであろう。それらの繰りかえしによって、「ひと」「もの」「こと」に対する視野が広がっていくと考える。友達と一緒に活動する中で、「一人で活動しても楽しいが、友達と一緒に活動すると、はじめて分かることがあったり、いろいろなことに気づいたり、できなかったことができるようになったりするからもっと楽しい」という「かかわり」のよさを実感する経験を積むことが、知識創造を促していく上で大切になってくるのである。そこで、生活科における「かかわり」を活性化するための手だてを、以下の五つの観点で述べていく。

(1) 「かかわり」の必要感をもたせる

必要感のある
「かかわり」

「ひと」「もの」「こと」とかかわりながら活動する中で、対象と自分との間に自分なりの願いが生まれてくる。その自分の願いを実現したいという強い思いをもち、それを実現しようと試みる時、子どもは、友達がどのように取り組んでいるかを見てみたくなったり、やり方や考え方を尋ねてみたくなったり、詳しく聞きたくなったり、教えてもらいたくなったりするであろう。つまり、子どもが目的意識をしっかりともち、友達とかかわりたいという必要感を伴いながら活動に取り組むことで、新しい気づきが生み出されるのである。

必要感を生む
素材や課題の設定

子どもに必要感をもたせるためには、まず子ども自身が「ひと」「もの」「こと」と十分に向き合い、自分の思いや願いを具体的にもつことができるような素材を吟味し、課題を設定することが必要であると考ええる。

(2) 体の様々な感覚を磨かせる

体の様々な感覚を
使った実感

生活経験が少ない1、2年生の子どもにとって、対象を様々な面からとらえることは難しい。そこで、「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験の中で、視覚、触覚、聴覚、嗅覚、味覚など、体の様々な感覚を働かせ実感する経験を取り入れていく。その際、体の様々な感覚を意識して「ひと」「もの」「こと」とかかわることができるように、ワークシートや板書などを工夫することで、体の様々な感覚を使うよさに気づかせていきたい。体の様々な感覚を使うよさを知り日常的に使っていくことで、子どもが元々もっていた感覚がさらに磨かれていく。それぞれの子どもが豊かに感じるできるようになれば、友達の活動の様子を見たり考えを聞いたりした時に、それらも具体的にイメージしながら受け止めることができると考える。

(3) 共通体験と選択活動を組み合わせて設定する

共通体験

クラス全体で共通体験する機会をもち、活動の中から生まれる気づきや思いが、友達と同じであったり、異なっていたりすることを経験させる。同じ素材の中からも様々な気づきや思いが生まれることを実感させることで、多様な見方や考え方を知る機会としていきたい。それらの経験を積み重ねることで、選択して取り組む活動の場合であっても、自分が経験していない活動についての友達の気づきを、自分の気づきと比べてとらえたり、想像したりすることができるようになると考える。

選択活動

(4) 追体験により友達の気づきを実感させる

気づきの追体験

友達の気づきをさらに実感を伴ってとらえることができるよう、体の様々な感覚を使いながら追体験する活動を設定していく。友達の気づいたことについて、実際に自分の目で見ると、触れるなど、体の様々な感覚を使って確かめることで、友達の気づきを実感することができるであろう。また、友達の活動の様子を見て気づいたことや友達からアドバイスをしてもらったことなどを、追体験の場で試してみることで、自分の願いの実現をめざすこともできると考える。

(5) 気づきの表出方法を工夫する

気づきの表出方法

単元に応じてワークシートや学習のまとめ方などに変化をつける。気づきを模造紙に書き入れてまとめる、画用紙にペアでまとめる、自分の考えを自分でまとめたものを紹介する、クイズや遊びを取り入れるなど、気づきを表出させる方法を単元によって変えることで単元のねらいをクローズアップしていく。

ふりかえりの観点

また、ふりかえりの観点を工夫することで、子どもの様々な感覚を働かせた気づき、「ひと」「もの」「こと」の特質や本質に迫る気づき、友達との「かかわり」の中での自分の変化などについて子どもが意識することができるようにしていきたい。

4 実践例 — 1年 —

(1) 単元名 ささのはさらさら

(2) 本單元における知識創造

七夕の紹介や笹かざり作りなどを行う七夕パーティーを通して 昔から伝承されてきた文化のよさや季節感を実感し 五節句の一つである七夕を積極的に楽しもうとする

季節の行事を楽しむ活動の一環として、奈良時代から伝えられてきた年中行事である七夕を取り上げる。七夕は、五節句、人日（1月7日）、上巳（3月3日）、端午（5月5日）、七夕（7月7日）、重陽（9月9日）の一つである。これまで、端午の節句の時期には、こいのぼりのかざりを作り、「こいのぼり」を歌って節句を楽しんだ。また、旧暦に合わせた6月5日には菖蒲を使い、笛のように吹くなどの活動を行った。菖蒲を家にもち帰った後は、頭に巻いたり、ふとんの下に敷いて眠ったり、風呂に入れ家族と一緒に菖蒲の香りを感じたりなど、季節の行事を楽しむ様子がかがえた。

本單元では、子どもが七夕に関して知っていることを出し合うことから学習を始める。これまでの生活経験から、笹かざりや短冊などが出されるであろう。それらをもとに、「七夕パーティーをしよう」という課題を設定し、歌、七夕話の紹介、かざりなど、子どもが取り組みたい項目に分かれて活動をスタートする。グループに分かれて活動していく中で、自分が作ったことがなかったかざりの作り方を知り、それまで関心がなかった天の川や星、七夕伝説などについて興味をもち始めることを期待する。

そして、それぞれのグループが準備してきたものを合わせて七夕パーティーを行う。「たなばたさま」を歌う、七夕の伝説を知る、笹かざりの作り方を紹介するなどの内容を七夕パーティーの前半部で楽しむことが、昔から続いてきた行事のよさに気づくきっかけとなるであろう。また、パーティーの後半部に友達と教え合いながら笹かざりを作る・かざることで、より一層七夕の楽しさを実感することができると考えている。

七夕パーティーの翌日が7月7日、七夕である。家庭でも、かざりを作る、短冊に願いを書く、かざりや短冊を笹竹にかざる、実際に夜空を見上げて星語りをするなどしながら、七夕の楽しさを味わってほしい。

(3) 「かかわり」を活性化するために

① 本單元における「かかわり」の活性化

本單元における「かかわり」の活性化を、自分なりの思いや願いをもって七夕パーティーを行う中で、友達の話聞いて新たな気づきを得たり、笹かざりの作り方を教え合うことで友達の工夫や七夕の伝統に目を向けたりしながら、積極的に七夕を楽しもうとする状態ととらえる。

② 本單元における「かかわり」を活性化する手だて

・「かかわり」の必要感をもたせる

子どもの経験が豊かになるように、その日、その頃にしかできない活動を大切にしていこうと考えている。七夕は年に一度の行事であり、笹かざりもみんな教え合いながら作ることで楽しさが広がることなどから、七夕パーティーをしようという設定によって友達とかかわる必要性を感じながら活動を進めることができると考える。

・体の様々な感覚を磨かせる

笹竹は、七夕には欠かせない。笹かざりを楽しむ際には、笹竹そのものにも親しませたい。実際に笹の葉に触れたり、風にそよぐ音を聞いたりしながら気づいたことを出し合い、夏の風情を感じさせたい。

・共通体験と選択活動を組み合わせて設定する

子どもの希望する項目ごとにグループをつくって準備を進めた後、七夕パーティーを行う。グループごとに準備してきたものを七夕パーティーとして集約することで、みんなで作り上げて楽しむよさに気づかせたい。




・追体験により友達の気づきを実感させる

七夕パーティーでは、友達の笹かざりの紹介後、かざりを作る時間を設ける。笹かざりの作り方を教える子どもを募り、交代しながら活動を進める。実際にかざりを作ったり笹竹にかざったりすることで、七夕の楽しさを実感させたい。

・気づきの表出方法を工夫する

七夕パーティーの楽しさをふり返る場面では、活動そのものの楽しさだけではなく、友達から教わってできるようになったこと、初めて知ったことなどの観点からもふり返るようにする。友達とかかわるよさに気づかせるとともに、自分の変化についても自覚できるようにしていきたい。

(4) 単元計画 (総時数 4時限+課外)

主な活動と内容	「かかわり」を活性化する手だてと意図
<p>1 七夕パーティーのイメージをもつ (7月7日は何の日だろう)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・7月7日は七夕だ ・天の川を見る日だね ・笹竹にかざりをつけるよ ・短冊に願い事を書くよ ・みんなで七夕パーティーをしよう ・どんな準備をしたらいいかな 	<p>想起</p> <p>ほとんどの子どもは、幼稚園や保育園、家庭で七夕に関する行事を行った経験があると思う。そこで、7月7日について知っていることを出し合い、七夕のイメージをつかませたい。また、七夕のイメージがわいた所で、笹竹を提示する。笹竹を見たり、触ったり、揺らしてみたりなど、体の様々な感覚を働かせることで、笹竹、笹の葉の感触や音も同時に楽しむことができるようにしたい。</p>
<p>2 七夕パーティーの準備をする (七夕パーティーの準備をしよう)</p> <p>音楽グループ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「たなばたさま」をみんなで歌おう ・「きらきらぼし」も歌いたいね <p>紹介グループ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・織り姫と彦星の話をしよう ・天の川の話をしてよう ・七夕の話を家の人に聞いてみようかな <p>かざりグループ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天の川のかざりを作りたいな ・ちょうちんの作り方を教えてよ ・ほかにどんなかざりがあったらいいかな <ul style="list-style-type: none"> ・短冊はみんなで1枚ずつ書こう ・もうすぐ七夕パーティーだ 楽しみだな 	<p>表出・共有</p> <p>七夕パーティーにどんなコーナーがあったらいいかを相談した後、自分で受けもちたいパーティーの項目を決め、その項目ごとにグループを編成して準備を行うようにする。自分が得意な項目を受けもとうとする子どももいれば、初めてのことに挑戦しようとする子どももいるであろう。お互いに相談したり教え合ったりしながらグループで準備を進めることができるよう、相談タイムを適宜とっていきたい。また、かざりの作り方や七夕について伝えられている話を家族などに尋ねる機会ももち、それらをグループの中で紹介し合うことで、受けつがれてきた伝統を知るきっかけとしたい。</p>
<p>3 七夕パーティーを開く (みんなで七夕パーティーを楽しもう)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで「たなばたさま」を歌いましょう ・織り姫と彦星の話を紹介します ・かざりの紹介をします 後で一緒に作りましょう <ul style="list-style-type: none"> ・織り姫と彦星の話を初めて知ったよ ・わたしの知っている話と少し違っていたよ ・かざりをつくってみたいな 作り方を教えて <ul style="list-style-type: none"> ・教えてもらったら 上手にできてうれしいな ・みんなですてきな笹かざりができたね ・家に帰ってかざりたいな ・家でも天の川を見ながら七夕パーティーをしよう 	<p>表出・共有</p> <p>笹かざりの紹介後、かざり作りを体験する時間をもつ。七夕の紹介は話を聞くことで気づきを得ることができるが、かざり作りは、実際に体験してこそ楽しさを実感できると考える。そこで、作りたいものごとに小グループを編成し、かざり作りの子どもが中心となって教え合うようにする。実際に作ったかざりを笹竹にかざること、七夕の楽しさをより強く味わうことができると考える。</p> <p>共有・結合</p> <p>七夕パーティーのふりかえりでは、楽しかったこと、友達から教えてもらってできるようになったこと、初めてわかったことなどを観点として問うことで、七夕の楽しさや伝統に気づくとともに友達とかかわるよさにも気づかせていきたい。</p>

(5) 本單元における授業の実際と考察

本單元では、昔から伝承されてきた七夕という文化のよさや季節感を実感し、五節句の一つである七夕を積極的に楽しもうとすることをめざす知識創造として学習を進めた。ここでは、「かかわり」を活性化するための手だてをもとに、本單元を考察していく。

① 「かかわり」の必要感をもたせる

学習の初めに、七夕という言葉からイメージすることを四つまで記入させ、七夕について知っていることについて調査した。表1は、記入されたキーワードについて示したものである。

項目 キーワード	願い事・短冊		笹かざり			七夕の星・伝説				歌	計
	願い事	短冊	笹竹	かざり	折り紙	星	天の川	織り姫・彦星	妖精		
1	願い事をする			かざりをかざる			天の川が見える	織り姫と彦星が会える日			4
2	願い事		竹	あみ						おどり	4
3	願い事	短冊			折り紙	星					4
4		短冊	竹		折り紙	星					4
5			竹		折り紙	星				妖精	4
6			竹		折り紙	星				妖精	4
7	お願いをきく		竹		折り紙						3
8	竹に願いを書く		笹	ぼんぼり							3
9	七夕の紙を書く		竹	笹に紙をかける							3
10		短冊		かざり				織り姫・彦星			3
11	願い事		竹		折り紙						3
12	願い事		竹		折り紙						3
13	願い事を書く・かなえる日		竹					織り姫・彦星			3
14				たなばた作り			天の川が見える	乙姫・彦星			3
15					折り紙	星				歌	3
16	紙に願い事を書く			竹にかざりをつける							2
17	笹に願い事をかざる			かざりをかざる							2
18	願い事		竹								2
19	願い事							織り姫・彦星			2
20	願い事		竹								2
21	願い事・お星様に願い事							織り姫・彦星			2
22	願い事を書く			笹にかざりをつける							2
23	願い事を書く		竹								2
24	願い事を書く							一年に一回二人が会える			2
25	願い事を書く・となえる			かざりをかざる							2
26	願い事をかなえる日			かざりを作る・かざる							2
27	願い事をかなえる日		笹								2
28	願いを紙に書く			かざりを作る							2
29				こまを作る						おどる	2
30	紙に願い事										1
31				かざり							1
32				かざり							1
33				かざり作り							1
34			笹								1
35							天の川				1
36											0
人数	24	3	15	12	8	5	3	7	2		
	27			35				17		3	83

表1 七夕のイメージ

表1を見ると、七夕という言葉から、「願い事（短冊）」「笹かざり」をイメージする子どもが多いことがわかる。一方で、七夕という言葉を知らない子どもや、ほとんどイメージできない子どももいる。「願い事（短冊）」「笹かざり」をイメージする子どもが多いのはこれまでの生活経験で、笹竹に願い事を書いた短冊を結びつけたことがあるからだろう。

その後、ワークシートに書かれたキーワードをについて知っていることを発表させたのであるが、短冊やかざりを笹竹につけた記憶はあっても、「作り方は知らない」「自分ではつくれない」という子どもがほとんどだった。また、七夕の伝説や星などについても、「何となく聞いた覚えはある」「言葉だけは知っている」「自分では説明できない」と話していた。つまり、七夕に関するキーワードは知っていても、その内容についてはほとんど知らないというのが実態であった。

この活動によって、七夕について、自分が知らない、わからないことがたくさんあることが明らかになった。そして、「自分の知らないことを友達から教わりたい」「よくわからないことを調べてみたい」「知らないことがたくさんあるから自分一人では調べられない」という思いが出され、みんなで七夕パーティーを開いて紹介しようという意識へとつながっていった。

このように、単元の初めに、それぞれの子どもがもっている七夕のイメージを出し合うことで、知らないことや分からないことが明確になり、「みんなで七夕パーティーをして楽しむ中で、七夕についてもっと詳しく知りたい」という活動の方向性が見出されたと考えられる。そして、七夕パーティーを行うという設定によって、役割を分担する必要感も生まれた。これが、グループで役割を分担し、グループの友達と教え合いながら準備を進めることにつながったと考える。

② 体の様々な感覚を磨かせる

これまで、アサガオの栽培や草花遊びなどの学習において、「よく見てみよう（目）」「触ってみよう（手）」「音は？（耳）」「においは？（鼻）」の中から観点を選んで示すことで、体の様々な感覚（部位）を使うように促してきた。体の様々な感覚（部位）を意識的に使う活動を続けてきたことで、少しずつではあるが、「もの」を観察する視点が広がってきたと考えられる。

本単元では、七夕の大まかなイメージを出し合った後、笹竹を提示した。笹竹を見たことがある子どもがほとんどであったが、じっくりと観察した経験はなかった。そこで、「よく見てみよう（目）」「触ってみよう（手）」「音は？（耳）」「においは？（鼻）」の四つの観点を示し観察した。ワークシートに発見したことを記入した後、四つの観点ごとに色を変えたカードに一番の発見だということを書き、実際の笹竹に位置づけながら発表していった（写真1）。

「笹の葉の表がつるつるしていて裏がざらざらしている」「葉の表に線があり裏には毛が生えている」「揺らすとさらさら音がする」などの気づきが出された。発見の発表では、発表を聞くだけではなく、実際に笹竹を見たり触ったりしながら、自分の体の感覚を使ってそれらの発見を確かめるようにした。葉の枚数を数える、葉についている毛を触る、下の方の葉と上の方の葉を比べるなど、実際に見たり、触れたりして確かめることで、友達の発見したことを実感することができた（資料1）。その中で、同じ場所を見ていても、自分とは違う体の感覚を使うことで異なった発見があることや、同じ場所を同じ感覚を使って観察していても、人によって感じ方や発見が少しずつ違う場合があることに気づく子どももいた。

観察した笹竹は、そのまま掲示し、気づいたことをつけ加えることができるようにしておいた。時間が経つと葉の色が変化していくことや笹の葉が丸まってしまうことなどに気づき、友達に知らせたり、カードに書き加えたりする様子が見られた。

今後も意識的に体の感覚を働かせる活動を取り入れ、気づきを実感できるようにしていくことで、子どもの感覚をさらに磨かせていきたい。

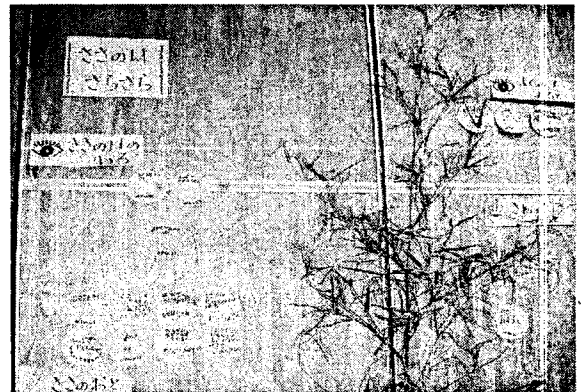


写真1 笹竹について気づきを紹介

- | | |
|----|--|
| A児 | 笹の葉の生えているところに毛があります。 |
| B児 | どこ？ |
| A児 | ここ。このはっぱのついているところ。 |
| B児 | あった、あった。葉っぱの毛は見えていたけれど、ここの毛には気がつかなかった。 |
| C児 | こっこの葉っぱの根元にもあるよ。 |
| D児 | 毛をさわってみると、ちくちくするよ。 |

資料1 笹竹の観察の発表

③ 共通体験と選択活動を組み合わせて設定する

本単元では、共通体験として、「笹竹の観察」「七夕パーティー」を設定し、選択活動として、「七夕パーティーの準備」を取り入れた。「笹竹の観察」については、先に述べたように、体の様々な感覚を磨かせるためには、共通体験が有効であると考えた。また、七夕パーティーにおいて選択活動と共通体験を組み合わせたのは、グループで七夕パーティーの準備をし、七夕パーティーとしてそれらを集約することで、みんなで作り上げて楽しむよさに気づかせたいと考えたからである。ここでは選択活動「七夕パーティーの準備」と共通体験「七夕パーティー」について述べていく。

(ア) 選択活動「七夕パーティーの準備」

七夕パーティーの準備は、表2のように、「歌グループ」「七夕の話グループ（星、天の川、織り姫・彦星、橋の4テーマ）」「かざりグループ」の中から自分が一番取り組みたい項目を選択し、八つのグループに分かれて進めた。グループごとに計画をたて、担当した項目について、それぞれの子どもが家族に尋ねたり、絵本や図鑑で調べたりした。

自分の担当した項目について調べた後、グループで分かったことを紹介し合った。資料2のように、天の川グループでは、天の川は星の集まり

であること、織り姫（ベガ）と彦星（アルタイル）の間に天の川があることが共通理解された。発表方法を考える際に、このグループでは、E児のワークシートだけを使って発表しようとしていた。そこで、調べてきたことを出し合った会話を想起させ、自分たちの調べた内容の相似点についてもう一度考えさせた。それにより、それぞれの調べてきたもののよいところを取り入れていく方向に変更していった。天の川は、G児の描いてきた黄色の星の集まりを使う予定だったが、準備の途中で青色の星の集まりに変わっていた。その理由を尋ねると、もう一度図鑑で調べてみたら、天の川の写真は青い星の集まりだとわかったから変えたという説明だった。少人数で同じ課題について話し合いながら準備を進めることで、それぞれの知識が共有され、さらに新しい気づきが生まれることにつながった一つの例といえる。

このほか、かざりグループでは、調べてきたかざりの作り方を紹介し合いながら、作り方の共通点や難易度を考え、紹介の仕方を相談していた。また、歌グループは、「たなばたさま」にぴったり合うような打楽器のリズムや振りつけを、繰り返し試しながら工夫していた。

このように、七夕パーティーの準備では、グループで調べたり、まとめたり、工夫したりしながら活動を進める中で、それぞれの考えからよいところを引き出そうとする動きや、もう一度自分の考えを見つめ直し、新たな気づきを得ようとする様子が見られた。七夕パーティーの準備という選択活動を取り入れたことで、自分の調べてきたことと友達の調べてきたことを結びつけながら考え、それぞれの気づきや表現のよさを取り入れながら話し合いや準備を進めていくことのよさ、みんなでパーティーを作り上げていく楽しさに気づくことができたと考えられる。

歌	歌おどりグループ
七夕の話	星グループ
	天の川グループ
	織り姫 彦星グループ
	橋グループ
かざり	かざりグループ
	七夕折り紙グループ
	かざり（彦星）グループ

表2 七夕パーティーの準備グループ

E児	みんなが調べてきた文を読んでみよう。 (それぞれ自分の調べてきたことを紹介)
F児	Eさんの文がわかりやすいね。 Eさんのお話を発表しよう。
T	天の川のこと、一緒なことはあった？
G児	天の川は星がたくさん集まっているというのは、ぼくが聞いたのと同じ。
F児	ぼくも同じ。
G児	Hさんの絵がじょうずだよ。
H児	お母さんに教えてもらったよ。 ベガとアルタイルという星の間に、天の川があるんだよ。
F児	ベガとアルタイルという星の名前は、ぼくの調べてきた名前と一緒にだよ。
↓ (発表の準備中)	
T	どうして天の川の星が青いの？
F児	はじめはGさんの絵にしようって言うていたけど、ぼくがもってきた本の天の川の写真をよく見たら、天の川は青い星が集まっていたから変えた。
G児	ねえ見て、ほら、青色。

資料2 天の川グループの話し合い・準備の様子

(イ) 共通体験「七夕パーティー」

グループに分かれての準備を整えた後、共通体験として「七夕パーティー（資料3）」を行った。

歌グループが打楽器の演奏を担当し、クラス全体で「たなばたさま」を歌った後、七夕の話の紹介へと進めた。七夕に関する星や伝説の発表は、グループごとに画用紙に図を描いたり、ペープサートを作ったりなどの工夫がみられた。それぞれの発表が個別のものとならず、先に発表したグループの話と結びつけながら話を聞くことができるよう、グループが発表に使用した絵やペープサートを利用した。それぞれの発表を1枚の絵に重ねていくことで（写真2）、七夕のイメージを膨らませることができたと考ええる。

その後、かざりの作り方の紹介へと進めた。この紹介は、次に行く笹かざり作りの活動につなげるものとして考えていた。かざりグループは、実物を見せながら作り方を詳しく説明をしたのだが、作り方の説明を続けたことで、子どもの意識が、七夕から折り紙遊びへと変化してしまうことになってしまった。かざりグループの発表は、作品の紹介や七夕にそのかざりを作る意味などに方向を定め、それらを笹竹に結びつけることで七夕を実感させることが必要であった。

選択活動でグループ別に行った七夕についての話し合いは、それぞれの子どもが話し合う中で、自分の中に新たな気づきを生み出し、思いを変化させていくことができるものであった。しかし、七夕パーティーでの紹介は、紹介の準備を整える際にグループ内で気づきを紹介し終えてしまった感があり、形式的な発表会になってしまった。その結果、七夕の楽しさを十分に実感することができなかつたと考える。共通体験と選択活動を組み合わせて取り入れていくことはどの学習においても必要なことであるが、その効果的な取り入れ方をもっと工夫していかななくてはならないと感じた。

④ 追体験により友達の気づきを実感させる

七夕パーティーの後半部では、かざりの紹介を受けて、笹かざりを作ってかざる活動を取り入れた。これは、友達と教え合いながら実際に笹かざりを作ってかざることで、より七夕の楽しさを実感できると考えたからである。

子どもにどのかざりを作りたいかを尋ね、天の川、ちょうちん、彦星があげられたところで、その作り方を教えてくれる子どもを募集した。そして、その子らを中心として小グループを形成し、活動に入った。教える役目を担った子どもが、十分に作り方のコツを身につけていなかったり、自分が作ることに没頭してしまったりなど、教えながら作るということが難しい場面も見られた。また、ちょうちんや彦星は作り方が単純で割合簡単につくれたが、天の川は切り込みの入れ方が難しく、うまく作れない場合もあった。その中で、どうしたらうまく広がって伸びる天の川を作れるかと教えを仰いだり、自分で試したりする姿が見られた（写真3）。

一つのかざりを笹にかざり終えた子どもは、もう一度同じかざり作りに挑戦したり、違うかざりを作ろうとしたりしていた。そして、「鳥の橋を作りたい人はいない？こっちに来て、「伸びる天の川の作り方を教えて」「織り姫と彦星の違う作り方を知っているよ」など、自分たちで声を掛け合いながら、新たにグループ作りをして活動を続けていった。

この笹かざりをグループで作る活動では、子どもがかざり

七夕パーティー

1. 歌「たなばたさま」
2. 七夕の話1「ほし」（絵）
3. 七夕の話2「天の川」（絵）
4. 七夕の話3「織り姫と彦星」（ペープサート）
5. 七夕の話4「橋」（絵本と鳥の橋）
6. かざりの紹介1「天の川」
7. かざりの紹介2「あみ・彦星・ちょうちん」
8. かざりの紹介3「彦星」
9. 笹かざり作り
10. ふりかえり

資料3 七夕パーティーのプログラム

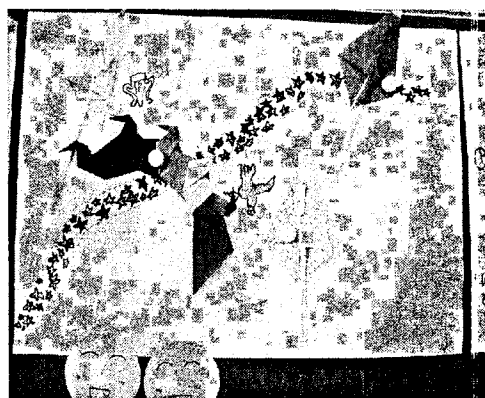


写真2 七夕の話の紹介



写真3 天の川の作り方を教え合う

作りを通して「かかわり」をもととする姿は見られた。しかし、この追体験を取り入れたねらいは、かざり作りを楽しむことだけではなく、七夕の楽しさを実感させることであった。活動を進める中で、教師自身が七夕の楽しさに気づくことと七夕かざりを作る楽しさを感じることを混同してしまったことで、子どもの思いがかざりを作って楽しむことだけに向いてしまったと考えられる。作ったかざりを自由に笹につけさせたのであるが、教師が笹竹にかざりをつけにきた子どもに、「どのあたりにかざりたいのか」「どうしてその場所にかざりたいのか」「かざってみたらどんな気もちになったか」など、かざりと笹竹や七夕を結びつけるような話しかけをしていたならば、かざりと笹竹、七夕が一つにつながり、七夕の楽しさをより実感することができたのではないかと考える。

⑤ 気づきの表出方法を工夫する

七夕パーティーのふりかえりでは、活動の楽しさだけではなく、初めて知ったことや友達から教わってできるようになったことなどの観点から振り返ることで、友達とかかわるよさや、自分の変化に気づかせたいと考えていた。そこで、「初めてわかったこと」「楽しかったこと・うれしかったこと」「明日7月7日の七夕には…」という3点から七夕パーティーを振り返るワークシートを準備した。

「七夕パーティーで初めてわかったこと」として、七夕の話に関することをあげる子どもが多かった(表3)。特に、ベガ、アルタイル、デネブなどの星の名前、それらの星が三角形を形成していること、七夕伝説の一つである鳥が橋を作る話が印象に残っているようであった(資料4)。単元のはじめに行った調査(表1)と比べても、「星」や「七夕伝説」について意識が高まっていることがわかる。

その一方で「初めてわかったこと」の中に天の川に関する記述はなかった。天の川グループの発表の際に、グループ活動で使っていた天の川の写真を紹介させるなど、子どもの視覚に訴える場を作っておけば、天の川の話もより実感をもって受け入れられたのではないかと考えられる。

「楽しかったこと・うれしかったこと」については、笹かざり作りに関することで占められていた(表4)。その中には、資料5にもあるように、友達に教えてもらって作ることができた喜びを表すことも多く書かれていた。このことから、子どもは、かざり作りの活動を楽しみながら友達とかかわるよさにも気づいていたといえるであろう。自分がかざり作りの活動をするを楽しむだけでなく、その活動の中で、友達と一緒に活動する楽しさを感じている表れだと考えられる。

このように、かざりを作る活動の中で、子どもが友達と学習する楽しさを感じていることは見て取れたが、それが本単元でめざしていた知識創造につながったかということ、そうとはいえない。それは、ふりかえりの「明日7月7日の七夕には…」という項目に、「かざりを作る」とだけ記入している子どもが多

笹かざりの 作り方	七夕の話	
	星	七夕伝説
13	18	14

表3 七夕パーティーで初めてわかったこと

<ul style="list-style-type: none"> ・ベガとアルタイルは知っていたけれど、デネブがあるというのは知りませんでした。 ・ベガとアルタイルとデネブで三角形になっているのが初めてわかりました。 ・天の川の橋は普通の橋だと思っていたけれど、鳥が作った橋とは知らなかったです。雨が降ると会えないのは知らなかったです。 ・天の川は、上、下、上、下というふうに作りました。
--

資料4 七夕パーティーのふりかえり

「初めてわかったこと」

教えた	笹かざり			歌
	教えてもらった	作れた	かざれた	
3人	12人	20人	5人	1人

表4 七夕パーティーで楽しかったこと うれしかったこと

<ul style="list-style-type: none"> ・彦星など、いっぱい教えてもらって、いっぱい作れたのがうれしかったです。 ・天の川をいっぱい作りました。〇〇さんや△△さんなど、いっぱいの人に教えてもらったら作ることができてうれしかったです。 ・作る時、いっぱい人が来てくれて、入りきれないほど来てくれてうれしかったです。 ・歌やおどりがうまくてできたのが、すごくうれしかったです。

資料5 七夕パーティーのふりかえり

「楽しかったこと・うれしかったこと」

くを占めていたことから推察することができる(表5)。かざり作りは楽しめたが、その部分に意識がいきすぎ、七夕の楽しさを味わうことと乖離してしまった子どもがいたことは否めない。一つ一つの活動を「七夕」と結びつけながら学習を進めていこうとする姿勢が必要であった。

短冊(願い事)を書く	笹かざりを作る	星(天の川)を見る	パーティーをする
2	24	9	2

表5 7月7日七夕には…

七夕パーティーの終わりに、「初めてわかったこと」「楽しかったこと・うれしかったこと」「明日7月7日の七夕には…」という3点から活動を振り返ったことが、より広い目で自分の活動を見つめ直すことにつながった。それによって、自分の変化や友達と活動するよさを自覚することができたと考える。

(6) 成果と課題

本単元のめざす知識創造は、「七夕を積極的に楽しもうとする」ことである。「七夕を楽しむ」ということを、「伝承されてきた七夕のよさを実感し、主体的にその伝統を受け継いでいこうとすること」ととらえ、それぞれの活動の中で、「七夕を楽しむ」ことは何なのかを「かかわり」を活性化するための手だてと対応させながら考えてきた。しかし、一つ一つの活動ごとに考えたことで、意識が、「七夕を楽しむ」ことから「活動を楽しむ」ことへと替わってしまった。そのため、単元全体を「七夕を楽しむ」という一つの流れの中で考える意識が弱まり、一つ一つの活動は楽しむが、その思いが「七夕の楽しさ」を実感することへはなかなかつながっていかなかった。

「かかわり」を活性化するための手だては、どれも生活科の知識創造をめざしていく上で必要なものである。しかし、これらは知識創造を促すための一つの手段であるという点を常に心に置きながら取り組んでいかななくてはならないと感じた。

生活科では、実感から生まれる気づきを大切にすることでなく、学習の中から生まれた気づきを自分の生活の中に生かしていくことも大切にしようとしている。本単元でも、学校で行った七夕パーティーを楽しむことがゴールではなく、生活の中で七夕を楽しもうとすることができるかが重要になってくる。

考察にも述べたように、ほとんどの子どもは、これまでの生活の中で七夕を経験したことがあった。ところが、学校での七夕パーティーを終えたときに、子どもから、「今までにも七夕会はしたことがあったけど、今日学校でしたのは今までのとは違う。」という声があげられた。「今までは、ほんの少ししか自分でしなかったけれど、今日はいろんなことをみんなでしたのが違う。」というのである。これまでに七夕の経験があっても、準備は大人がしてくれ自分は参加するだけだったが、今回は、自分たちでいろいろなことをやったのが大きな違いだということである。つまり、自分たちで作り上げる喜びもこの学習で子どもは得ることができたということである。これは、翌7月7日の行動にもつながっており、実際に多くの家庭で七夕を楽しんでいた(資料6)。これらの日記の内容と最初に調査した七夕のイメージと比較しても、七夕に対する子どもの思いが大きく変化していることがわかる。

- ・ぼくは、家で笹かざりをしました。輪かざりや天の川や彦星をつくりました。じょうずにできました。一番のお気に入り、天の川です。細かく切って広げた形は、まるで本物の天の川でした。そして笹にかざりました。
- ・すてきな天の川ができましたね。ほかのかざりもとってもじょうずだね。玄関がとってもぎやかで楽しくなってよかったね(母)
- ・きょう、七夕かざりをつくりました。家族で天の川や輪っかをつくりました。赤、オレンジ、黄色、青の折り紙でつくりました。楽しかったです。じょうずにできてうれしかったです。
- ・家族みんなでかざりを作ったら、とてもきれいな七夕かざりになりました。みんなの願い事もかなうといいね。(母)
- ・きょうは七夕です。夜に星座を見ました。ベガもアルタイルも見つけられました。銀河は見つけられませんでした。星座板を使ったので、とてもはやく見つけることができました。また見たいです。
- ・とてもきれいな星空でした。来年も一緒に見ましようね。(母)

資料6 七夕の日の日記より

子どもが自分なりの思いや願いをもって様々な対象とかかわる中で、実感を伴った気づきを生み出すことができるよう、そして、その気づきを生活の中に生かしていくことができるよう、大きな芯を通しながら、今後も取り組んでいきたいと考えている。